燎原

京都の民主運動史を語る会　会報　題字　住谷悦治

会代表　天野和夫

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込〕
口座番号 01060=7=15762

加入者名　燎原社

美山町　奥田修三　画　1991.6.29

綜合原爆展の頃　川合葉子

追想　品角小文

綴り方姉姉姉　西村泰一

闘争（一）続　田中豊蔵

奥田修三氏追悼　大谷良一　奥村和郎

燎原文芸

会員の短信

前号の訂正

綜合原爆展の頃

川合葉子

一

一九五一年七月十四日から十日間、京都駅前の丸物百貨店（現在の近鉄百貨店）において京大同学会主催の綜合原爆展が開催された。当時はまだアメリカ軍の占領下であったにもかかわらず、会場の決定にはいくらかの紆余曲折があったが、そのほかにはさしたる妨害もなくて、期間中三万人の入場者を数える成功をおさめた。

この原爆展が日本で最初の総合的な原爆展であったということは、この数年間に日本で出版された関連する資料集や年表、著書などによく記載されるようになった。しかし今から五年前、私たちが綜合原爆展に関する資料の掘り起こしを始める前には、事情は全く違っていた。主だった戦後の平和運動史に関する書籍でこの総合原爆展を記述したものは見当たらなかった。そのことは、かつて原爆展に関わった私たちにとっていかにも口惜しいことだった。

そういう私たちを否応なく資料探しに追い立てて、掘り起こし運動のきっかけを作って下さったのは、一九九一年当時朝日新聞京都支局長だった真期孝夫さんの取材だった。それから世話人会を作り、思いつく限りの関係者にアンケートをおくり、資料や情報の提供を求め、重要な人には聞き取りをしてその記録を残すという作業を重ねてきた。こうして記憶の底に沈みかけていた綜合原爆展の全体像が次第に浮き上ってきた。

このような作業の中間的なまとめとして、戦後五〇年の節目に合わせて小畑哲夫さんに書いていただいたものが、かもがわブックレットの『占領下の「原爆展」平和を追い求めた青春』として一昨年出版された。このブックレット出版の直前に岡田光正さんから綜合原爆展のパネルを写した写真二〇枚と会場の写真一枚が届けられた。

岡田光正さんは京大工学部建築学科の学生として、故西山卯三先生の指導のもとにパネル作りに参加され、展示構成の責任者でもあり、当時写真を撮影したという記憶を持って居られたので、探していただくように依頼はしていたのだが、岡田さん自身の執念がこの古い写真の発見を可能にしたのだと思う。ただ残念なことにネガは発見されず、この二〇枚に写っているパネルは九六枚分で、伝えられている展示パネルの総数一九〇枚の約半数である。

とはいうもののこの写真が見つかったことで、私たちはかつての綜合原爆展の規模や、総合性の程度を、視覚的に各方面の人々に伝え、納得してもらうことができるようになった。また入場者でいっぱいの会場風景の写真も強いインパクトで当時の状況を伝える役目を果たしている。それ以来ブックレットを読んだ人からの反応がじわじわと私たちのところに届き始めている。

こうして「丸物」の綜合原爆展のことはかなり分かってきたが、どうしてこのような原爆展をあの時期に開催できたのかとか、原爆展を作り上げた運動はその後どうなったかということなど、もっと細部にわたって調べたいことが山積みになっている。

二

綜合原爆展のことを当時の主だった商業新聞は全く記事にしていないので、私たちが略年譜などを作成するときに一番参考にしたのは、京大新聞縮刷版に収められている当時の学園新聞だった。

敗戦の年の九月一〇日に原爆報道が禁止され、一八日にプレスコードが発表されて以来、アメリカ軍の占領期間に私たちは原爆に関する報道をほとんど見ることができなかった。初期の厳しい事前検閲は次第に緩和され、一九四七年には事後検閲に移行し、一九四九年には検閲を行う米軍民間検閲所が廃止され、従って検閲もなくなっている。しかしながら、この緩和はプレスコード違反が少ないところから行われていたらしく、それに変わる自己規制が強力に働いていた事が検証されつつある。

さらに、占領政策違反の取り締まりを日本の政府機関に強制する「ウィロビー書簡」が、この前年の朝鮮戦争勃発の直前に出されていた。だから各新聞が原爆展のことを報道しないのは当然のことかも

知れなかった。そういう時期だから、この綜合原爆展ではじめてヒロシマ・ナガサキの被爆の実態を知った京都市民がほとんどだったに違いない。

当時レッドパージが労働界を直撃し、それは学園にも及んでいた。警察予備隊が発足し、朝鮮戦争の膠着に対してトルーマンが原爆の使用を考えていると報じられていた。学生たちは再軍備の危機を強く感じ取り、知ったばかりの原爆の被害を一人でも多くの人に知らせようしたのである。

三

この原爆展に先立って、京大では五月一四日から二〇日までの春期文化祭を「わたつみの声にこたえる全学文化祭」として開催し、そこに理学部と医学部から原爆展の出展があった。この展示が学内外の反響を呼んで、綜合原爆展へと発展したのである。パネル制作の指導をして、綜合原爆展の実現に寄与された西山先生も、この時はじめて被爆の実態をごらんになったようである。

この時期から、原爆展のことを記事にした京都の新聞が一紙あった。それは都新聞だった。このことは世話人の一人鈴木哲也さんが調べて下さった。いただいたコピーでは日付が明確ではないが、五月一四日付と思われる紙面に本文が三十一行二段でこの文化祭のスケジュールを紹介して、其の見出しに「原爆の総合展も」「京大で多彩な文化祭」と二行の見出しが付いている。

本文中にも、「特にこの期間中、原爆に関する総合展、美術展、写真展、エスペラント展なども催される」「十九日原爆に関する講演会、太田洋子氏外、午後一時法経第一教室、」と紹介されている。この講演会では医学部の天野重安助教授、理学部の木村毅一助教授（共に当時）が講演しており、いずれも原爆被害調査団の一員であった。

私が驚いているのは、この段階で総合展という位置づけがされているということである。私たちの聞き取りの中では、医、理両学部の出展の中心になったはずの人でさえ自分の学部が出展したものや、企画の経過は覚えていても、他学部の展示のあったことは意識すらしていなかった。学園新聞五月二十八日号には、この展示には四日間をつうじて四千人あまりの入場者があり、すでに立命、同志社、京教組、から開催申し込みが殺到している、と書かれていて、このうち同志社は六月十一日から三日間展示されて二千人が観覧、カンパ千数百円があったことが別の資料から分かっている。

この文化祭の展示は京大の学内では「小原爆展」と名付けられて、六、七月の間市内や府下、その後は他府県まで巡回し、展示に役立った。初期の予定には京都府庁や市役所も挙げられているが、実際に展示されたという資料はまだ見つかっていない。宇治の公民館での小原爆展は私も参加して、展示や説明の手伝いをしたことを覚えている。こういう巡回が「百貨店で綜合原爆展をやろう」という着想と気運を盛り上げていったのだろうか。

西山先生はその頃の克明な日記を遺しておられる。それによると、五月三十一日に新建築家集団の常任委員会を開いて、展示計画を立案し、各人の役割分担を決めている。「移動することを考え、パネル式にする。」という記述も別にある。先生はそれよりも早く、二十五日にパネルに使う写真の複写を始めておられる。同学会は春期文化祭からこの日までのどこで綜合原爆展の企画を決心したのだろうか。私たちはまだ其の経過を詰め切れていない。

ところで、都新聞は七月十二日と思われる紙面で「初公開の〝原爆の図〟」「十四日から丸物で開く」という見出しで同学会の綜合原爆展の開催を報じている。この記事には「被爆直後のヒロシマのパノラマ」を学生が会場に運ぶ写真が添えられている。更に会期中の一日の文化欄に「外・火傷と原子病―原爆の人体に及ぼす影響―特徴は発熱と血球破壊」という三段抜き三行の見出しを付けて、綜合原爆展のなかの医学部のパネルの解説記事を掲載している。記事の最後に（さ）と記されている。担当記者を示すものだろう。

この翌年の一九五二年八月、アサヒグラフが原爆の被害を特集してひろく国民に実態を知らせたのは、講和条約がすでに発効した後だったが、その時の編集長飯沢さんの決断がのちのちまで語りぐさになって、其の勇気が賛えられてきた。そういう当時の出版界の事情を知るとなおさら、地方紙とは言いながら、原爆展の取材を続け、記事にしていた新聞が京都にあったことは書き留めておく必要があるように思う。

私たちは綜合原爆展を陰で支えて下さった当時の丸物百貨店の宣伝部の方々にもあってお話を聞いたが、宣伝部に原爆展を持ち込んだ人として都新聞の記者井尻さんという名前を覚えておられた。私

たちは、出来ることなら当時の記者の方にもお会いして、思い出を伺いたいと思っている。

（かわい・ようこ　北区在住）

追想

品角小文

私は今、87才、人生の末期をむかえています。知らず知らずに、生きてきた社会と、対応してきた自分の歩みをふりかえっています。

男女差のはげしかった時代に生を受けて、現在のような男女平等の世に皆様と共に、生きてきました。その思い出をたどって見ますと…。

一九四五年（昭和二〇年）八月十五日日本は敗戦によって終戦をむかえました。

そして八月三十日、連合軍最高司令官マッカーサが着任し、九月二日、日本軍および、政府の代表者たちが、降伏文書に調印し、「日本の天皇及び、日本国政府の権限は最高司令官に属する」ことになって、占領政治がしかれることになりました。

ＧＨＱ最高司令官マッカーサは、日本政府に対して、憲法の自由主義化および、人権確保の五大改革を要求してきました。

その骨子は、

○完全な男女同権による婦人の解放

○労働者の団結権の保障と労働組合結成の奨励

○学校教育の民主化

○専制からの解放

○経済機構の民主化

でした。

男女同権を軸とした婦人解放はこのことによって決定づけられ、一〇月一五日治安警察法が廃止されました。そして一八九〇年（明治二三年）「集会及び政社法」によって禁止されてから五五年ぶりに、婦人に政党加入の自由がとりもどされたのでした。十二月四日には「女子教育、刷新要綱」が発表されて、教育の上での機会均等が示されました。さらに、十二月十七日、改正公布されました選挙法によって婦人参政権が確立され、公布された労働組合法によって、組合内における、男女の平等が規定されたのでした。

これまでの教師の月給も、男の方に及ばなかった女子教員も同額となったのです。また一方では、治安維持法も国防保安法もなくなり、府県の警察部長や特高関係は免職となりました。逆に戦時中拘禁されていた政治犯が釈放され、自由の身となりました。

こうした状態について、ある歴史家は、一つの法令が出されるたびに、支配階級は震動し、一般の男子は戸惑い当惑し、女性たちはいささか、まばゆい思いで、これを歓迎し、一方では、これで当りまえと思いながら、実質において、まわりと協調しながらがんばりました。

そして私自身は教師としての働きが、生煮えにならないよう、退職後も信念として、仲間の人達との交わりを大切にと努力しながら現在に生きるはげましとしています。

（しなずみ・こふみ　上京区在住）

綴り方
姓姓姓

西村泰一

混線は、アルバイターの誤配から始まりました。上ノ町下ノ町と歩けば十分の近い距離に、「西村姓」が四軒も集まってしまいました。私は一九三八（S一三）年からの住人ですが、あっというまに磁石に吸いよせられる鉄屑のように、四軒です。

この姓はかなりあるようで、私が応召したとき、事務室には、西村准尉、新兵の第一内務班五〇名のうち三名の西村。ある日、憲兵曹長がきて、西村一等兵をよびました。入口近くの戦友が、西村は三名いるのであります。して名前は？　と軍隊らしく角張って丁重にたずねました。

「バカ者。西村は西村だ。」

目茶苦茶に強引といいますか。敗ける軍隊はこんな点にも姿をみせていました。

＊　＊　＊　＊

「ごめん」

椿やボケの花ざかりの明るい午前でした。私の家の表扉を力一ぱい押し開けて、せわしく入ってきた五十男が

「ご主人を入棺します。」

瞼の腫れた男でした。ご主人とはこの家では私のほかおりません。男は時間におわれているのか急いで上へあがろうとしますので、「こらッ、ご主人はここにおわすぞ。入棺とはききすてならん。化け物かおれは」

怒鳴られて吃驚した腫れ眼は言葉がでず、視線をとばして跳びだしていった。

筋じ向いの奥の築後二年の家へ移ってきた血色のよい六十未満のご主人でした。その日も朝食をすまして、まもなく、ころっと。らしい。表札に「西村寓」。

＊　＊　＊

町内で北端の綺麗な奥さんの西村宅が遠方へ転居され、同姓は三軒になりました。減ることは好みませんけれども、それだけ混線は緩和されます。私はしばしば混線のために表のベルを押したお宅でした。

＊　＊　＊　＊

私の家にもっとも近いのは、高名らしい学者先生。双方家族の分まであって、黙ってポストへ入れ合って、無事進行中。

＊　＊　＊　＊

このところ数年余、私は体調よくなく入退院をくりかえしているのですが、病院にまで混線はついてきます。前回は男性、今回は女性。名前の末尾の字が私は一で、相手は子。しかも隣室へ入室。二日目でしたか、私は運動で廊下を歩いて戻ってくると、昼食の配膳がはじまっています。私は看護婦さんに気をきかしたつもりで、自分の分を持って部屋に入ったのですが、間違っていました。

私の塩（えん）と隣りの泰子さんの糖（とう）と、西村二人は減（げん）だけは一致していますが、えらいこっちゃ。食は人の生死に通じています。恥どころではないのです。終に本人の私が不覚をとりました。

この姓はいやどすナ。私は自身にこぼしました。戸籍ごと変更を希望しました。そんなとき、今日も近所の竹馬の友が見舞いにきてくれました。こんな話をするのは始めてですけれど、一しょに心配してくれた大切なご隠居はんは、後刻でんわをくれました。

「姓は、みだりになぶれへんで・・・それで考えた。良策やぞ・・・ええ家系の家をさがすさかい、養子に行け。」

「ええ？」おどろきました。余計な話をしたばかりに、新規の混線が、一つ殖えたかんじ。

「おおきに、ありがとう。けっこうな案どす」私は相手の気持ちにもう一ど「おおきに。けどもやなア、あかんのとちがうか。第一貰い手のない話で・・・」

（九七、四、八、了）

（にしむら・たいいち　伏見区在住）

闘争（一）続

田中豊蔵

五、労農党と日農の事務所

労農党京都支部連合会の事務所は京都市下京区大石橋西入りです。私の家から一丁位の近いところにあります。私はここによく出入りしました。書記は太田遼一郎君、長谷川博君がいました。長谷川君のハウスキーパーは島崎藤村の姪の島崎コマ子さんでした。また半谷玉三さんがこの労農党の主事でしたが、奥さんは神田兵三の妹さんです。自宅は大石橋東入るの近くにありました。

この労農党の事務所の奥の六帖が日本農民組合京都府連合会の事務所になっていました。ここには主事の泉隆君がとまり込んで活動していました。組合委員長は嵯峨の森英吉、執行委員には亀岡の木村忠一、綴喜の坂本兵蔵、小野治三吉、相楽郡の堀芳次郎などがいました。

泉隆君は本当にねばり強い活動家でした。私は彼等の一日の労をねぎらう意味で泉君等と一緒によく近くのうどんやへいきました。

ある寒い夜に私が事務所にいきましたが、泉君は留守です。太田君に聞くと

「国の石川県からお父さんが来られて一緒に外へ出ていった。」

ということでした。私は帰ろうかと思いましたが、夜どおし活動されている人々にあついうどんでもと思ってうどんやへ注文にいきました。すると奥の方で泉君とお父さんらしいおじさんとが二人で話をしている所でした。私もうどんをたべましたが聞こえてくる二人の話は、

「お前、国に帰ってくれ、皆んなが心配している」

「帰りたいのは山々だが、残って入る仕事をやりとげなければならんので、しばらくまって欲しい」

というのです。私は

「泉君、今晩は」

とあいさつしました。するとお父さんは

「隆が毎度お世話様になりまして」

とお礼のあいさつをされました。私もあいさつして帰りましたが、泉君も京大出身であり弁護士になれと言われていると申されていました。そして水谷長三郎弁護士の所に見習いに入っておられましたが、泉君は水谷との立場のちがいからわかれられたのです。

（以下次号）

（たなか・とよぞう　中京区在住）

奥田修三氏追悼

京都の民主運動史を語る会副代表奥田修三氏（立命館大学名誉教授）は、五月二五日、京都市桂病院で逝去されました。同氏が本会につくされた功績をしのび、謹んで哀悼の意を表します。

奥田修三氏　最後の短信

お世話様になります。

変らず入退院の生活をつづけております。総会が盛会であります様念じております。

皆様によろしく。

（四月八日燎原社あて）

「八・一五」回想文募集

戦前・戦時を生きのびてきた者にとって、忘れがたいのは一九四五年八月一五日の思い出でしょう。憲法施行五十年にあたり、あの八月一五日をどこでどのようにむかえ、何を考えたか、あらためて回想したいと思います。

左記要領で皆様の積極的な応募をお待ちします。

字数　一、〇〇〇字以内

締切　八月一〇日

事務局まで

奥田修三先生を偲んで

大谷良一

奥田先生との出会いは、立命大に産業社会学部が創設された時であったと思う。初期の産社懇親会の席上、奥田先生は、陸軍中尉奥田修三の所作を再現し、軍国主義時代の悪夢の青春を語り、平和と民主主義の学部を作ろうと呼びかけられた。

奥田先生は、故細野武男先生が京都教育センターを創設された時の初代事務局長であった。私は、奥田先生、貞広先生に呼びかけられて、「技術・家庭科」の共同研究者を引き受けた。奥田先生は宇治市、私は城陽市に新居を構え、ともに近鉄「大久保駅」から通勤していたので、ご一緒する機会が多かった。奥田先生は、驚嘆するほど、マメな人であった。その根底にあった思想は、人間同志の率直な付き合いこそ、民主主義社会を作り上げる基礎だという信念をお持ちだったのではないかと思う。

私が城陽市の教育委員会委員長を勤めた時期、奥田先生に城陽市史編さんの仕事をお願いした。

先生は、歴史学者としての本領を発揮され、地元の郷土史家、小・中・高の日本史の先生の協力を求めながら、旧家に残る貴重な史料や旧村・現市役所に保存されている行政記録を読み解き、地元各地区の「老人会」に出席し、その地域の人々の生活、生き方を語り、そうした出会いを大切にされ、楽しんでおられた。「城陽市史年表」「城陽市史　第二巻」「元禄村方日記」などは、先生ならではの大業績である。

最晩年には、「やましろ健康医療生協」初代理事長として「あさくら診療所」建設に、理念はもとより細かい点にも気配りされ、全力を尽くされた。「先生を偲ぶつどい」が、「あさくら診療所ホール」で行なわれるのは、このためである。

奥田先生を偲んで

奥村和郎

五月二十六日朝、先生の訃報に接した瞬間、足のすくむ思いがしました。

従来「燎原」の編集・発行に全力を尽くして来られた故湯浅貞夫さんと奥田先生が昨年一月、殆ど同じ時期に病に倒れられたので、私が事務局をお世話することになりました。

地元での民主運動の先頭に立ちながらも、大変な事務量をこなしてこられ、どんなにかご苦労されたかとお察しするにつけ、申し訳ない思いでいっぱいです。

先生の筆になる「燎原」一一〇号の挿絵が枕元に届いたでしょうか。先生の遺志をついで、今後とも引き続き「京都の民主運動史」を語り継いでいきたいと思います。

どうか安らかにお眠り下さい。

燎原文芸

四月恩師恒藤恭先生の没後三十年遺品展にて

天野和夫

春疾風師の歩みにも吹き荒れし
各様に追憶語り花供養
出席簿幾春を経し我が名見ゆ

歌集『羊雲』より

岩田成之助

まじまじと見るに忘れぬ幼な顔
いのちを生きて君も還りぬ
わが友のいくたりかははやく戦
死して朝のめざめに思ふこと多
し
この道も兵たりし記憶にいまい
まし師団街道といふ名を残す
賜暇ストに入らむとして今日の
日まで書きしことなき賜暇願ひ
出す
声抑へ処分覚悟に参加すと言ひ
きりて君は席にすわりぬ
溜めおきし組合情報も焼き捨て
て強制捜査の時に備ふる
「学力テスト拒否」黒板いっぱ
いに書かれたる教室に調査用紙
を配る
組合運動の制限さるる条例の議
決阻まむと市役所に来ぬ
市長斡旋の団体交渉に期待持ち
夜の庁舎に我等座り込む
すでにひとり逮捕されたる報あ
りて見おろす街路に警吏群がる
襲ひかかり捕へし時に抜け目な
く裏返し背広のネーム確かむ
浅き夢やぶられて待つ受話器よ
り第二次逮捕の報伝へ来る

○会員短信

源　照子

燎原という表意は反射的に火と水を連想させる。そして矛盾と発展との関連の中で未来をめざす喜びを！

（みなもと・てるこ　東山区在住　八三歳）

○前号の訂正

①三ページ四段末尾の「まはら・かおる」は「まはら・いく」に
②七ページ三段の会計監査報告中「七六五、〇〇〇円の会費収入」は「七九五、〇〇〇円の会費収入」に
「二〇三会員」は「二〇三会費納入者」に
③八ページ一段の役員の選任のうち世話人の「井出幸喜」は「井手幸喜」
にそれぞれ訂正いたします。

会および会報については、左記へご連絡ください。
〔事務局〕
〒六〇〇五　京都市東山区今熊野南日吉町三九
奥村和郎
TEL
FAX　〇七五-五六一-七四八五